

276. 守山市内における古墳時代 玉作り遺跡について

1. はじめに

守山市内では弥生時代や古墳時代の玉作り遺跡、ならびに玉類を出土する遺跡が数か所発見されている。その遺跡分布などの状況は明らかにされつつあるが、その他のことについてはまだ不明な点が幾つかある。ここでは未発表資料を中心に古墳時代における玉作りに関する集落内の様相、生産体制について検討を試みたい。

2. 遺跡の概要

古墳時代の遺跡は旧野洲川の左岸流域に広がる沖積平野に点在する。以下順にみてゆきたい。

①伊勢遺跡

伊勢町、阿村町にまたがり所在する。弥生時代から中世にかけての複合遺跡である。古墳時代においては前期の堅穴住居が数棟確認されているほか、4世紀末の小ピットから素文鏡と滑石製白玉、管玉、勾玉、ナツメ玉、緑色凝灰岩製管玉、碧玉製の管玉が一括で出土しており、意識的に埋められたものと考えられる。

②酒寺遺跡

播磨田町に所在する。弥生時代から中世にかけての複合遺跡である。古墳時代においては前期の住居が数棟確認され、そのうちの1棟から碧玉製白玉、管玉、ガラス製小玉が出土しており、未製品が含まれていないことから、玉作りは行われていなかったと考えられる。

③播磨田東遺跡

播磨田町に所在する。弥生時代から古墳時代にかけての複合遺跡である。古墳時代においては前期の住居が50棟以上確認され、大規模な集落を形成していたことが窺える。そのうち10棟から滑石製白玉、製作途中破損品、未製品、勾玉、有孔円板、剣形模造品、剥片、チップ、緑色凝灰岩の剥片、碧玉製管玉が出土しているほか、砥石や、紅簾片岩製の石鋸などの工具も出土しており、多様な石材を用いた集中的な玉作りが行われていたことが考えられる。

④川原田遺跡

川田町に所在する。古墳時代中期の集落の周辺部に位置することが窺える遺跡である。須恵器、土師器などの多量の遺物とともに滑石製管玉、紡錘車、剥片、チップなどが出土しており、周辺で玉作りが行われていた可能性が考えられる。

⑤横江遺跡

横江町に所在する。弥生時代から中世にかけての複合遺跡である。古墳時代においては5世紀後半の住居が確認されており、集落が形成されていたことが窺える。旧河道、土坑から滑石製白玉、白玉製作途中破損品、未製品、有孔円板、紡錘車、剥片、チップが出土しており、周辺で玉作りが行われていたことが考えられる。

⑥益須寺関連遺跡

吉身町に所在する。古墳時代から中世にかけての複合遺跡である。古墳時代においては5世紀後半から6世紀初頭にかけての住居が8棟確認されており、集落が形成されていたことが窺える。そのうち5棟から滑石製白玉、白玉製作途中破損品、剣形模造品、管玉、剥片、チップなどが出土しており、玉作りがおこなわれていたことが考えられる。

⑦吉身南遺跡

浮気町に所在する。弥生時代から古墳時代にかけての複合遺跡である。古墳時代においては5世紀後半から6世紀代にかけての住居が30棟近く密集した状態で確認されており、広範囲に広がる集落の中心地であったことが窺える。そのうち7棟の住居から滑石製白玉、白玉製作途中破損品、未製品、勾玉、有孔円板、剣形模造品、管玉、紡錘車、剥片、チップなどが出土しており、玉作りがおこなわれていたことが考えられる。

⑧吉身北遺跡

勝部町に所在する。縄文時代後期から中世にかけての複合遺跡である。古墳時代においては5世紀後半のカマド導入前後の時期から6世紀代にかけての住居が60棟近く密集した状態で確認されており、広範囲に広がる集落の中心地であったことが窺える。また、その範囲内に4基の円墳と2基の方墳があり、居住域と墓域が近接していたことがわかる。またこれらの墳墓は吉身北遺跡の住居総数から考えると築造は不可能であり、吉身南遺跡の墓域としても機能していたと考えられる。よって吉身南遺跡と吉身北遺跡は同一の集落遺



遺跡・時期	古墳時代期		
	古前	中 期	後 期
① 伊勢遺跡			
② 酒寺遺跡			
③ 播磨田東遺跡			
④ 川原田遺跡			
⑤ 横江遺跡			
⑥ 益須寺関連遺跡			
⑦ 吉身南遺跡			
⑧ 吉身北遺跡			
⑨ 阿比留遺跡			
⑩ 岡遺跡			
⑪ 経田遺跡			
⑫ 金森東遺跡			
⑬ 古高遺跡			
⑭ 吉身西遺跡			

図1 守山市内における古墳時代玉作り関連遺跡の分布と消長(S = 1 : 50000)

跡と考えられる。

吉身北遺跡の3棟の住居からは滑石製白玉、白玉製作途中破損品、未製品、勾玉、有孔円板、剣形模造品、管玉、紡錘車、剝片、チップなどが出土しており、玉作りがおこなわれていたことが考えられる。

⑨阿比留遺跡

小島町に所在する。古墳時代から平安時代にかけての複合遺跡である。古墳時代においては5世紀中頃から6世紀にかけての住居が15棟以上確認されており、集落が形成されていたことが窺える。それらの住居から滑石製白玉、白玉製作途中破損品、未製品、有孔円板、剣形模造品、剝片、チップ、緑色凝灰岩製管玉などが出土しており、玉作りがおこなわれていたことが考えられる。

⑩岡遺跡

岡町に所在する。古墳時代から鎌倉時代にかけての複合遺跡である。古墳時代においては5世紀中頃のカマド導入前後の時期から6世紀前半代の住居が22棟確認されており、集落が形成されていたことが窺える。6世紀前半の住居から滑石製白玉、白玉製作途中破損品、未製品、紡錘車、剝片、チップが出土しており、玉作りがおこなわれていたことが考えられる。

⑪経田遺跡

今宿町に所在する。縄文時代から古墳時代にかけての複合遺跡である。古墳時代においては後期の方墓が3基確認され、そのうちのSX-1東辺溝から滑石製の勾玉、ガラス製の小玉が一括して出土しており、未製品などが出土していないことから何かの目的で使用された可能性が考えられる。

⑫金森東遺跡

守山町に所在する。弥生時代から中世にかけての複合遺跡である。古墳時代においては前期から後期初頭にかけての住居が35棟以上確認され、長期間にわたって集落が形成されていたことが窺える。そのうち5世紀前半の住居1棟から滑石製白玉、白玉製作途中破損品、未製品、勾玉、紡錘車、剝片、チップ、緑色凝灰岩製管玉が、6世紀前半の住居から滑石製白玉、勾玉、有孔円板、管玉、剝片、チップなどが出土している。いずれの住居からも未製品、剝片、チップが出土していることから玉作りが行われていたことが考えられる。

⑬古高遺跡

古高町に所在する。弥生時代から古墳時代にかけての複合遺跡である。古墳時代においては6世紀代の住居が6棟以上確認されている。それらの住居からは滑石製白玉、白玉製作途中破損品、未製品、有孔円板、剣形模造品、管玉、剝片、チップ、砥石や、紅簾片岩製の石鋸が出土していることから玉作りが行われていたことが考えられる。

⑭吉身西遺跡

守山町に所在する。縄文時代から平安時代にかけての複合遺跡である。古墳時代においては6世紀代の住居は堀立柱建物が多く、10棟ほど確認されており、集落が形成されていたことが窺える。またその範囲内に円墳と方墳があり、居住域と墓域が近接していたことがわかる。これらの住居からは滑石製白玉、白玉製作途中破損品、未製品、有孔円板、剣形模造品、管玉、剝片、チップ、紅簾片岩製の石鋸が出土していることから玉作りが行われていたことが考えられる。

3. まとめ

以上のことをまとめると次のようなことがわかる。前期においては滑石や緑色凝灰岩や碧玉など多様な石材を用いて生産している。これは酒寺遺跡や、播磨田東遺跡の状況からだけでなく、伊勢遺跡の一括で出土した玉類の石材から明らかである。それ以降、中期以降においては滑石のみを用いて生産しているようである。吉身南遺跡、吉身北遺跡、阿比留遺跡、岡遺跡などではカマドの導入がみられたり、製塩土器、鉄滓、初期須恵器が出土していることから、5世紀中頃における渡来系技術の伝播の一環として滑石を用いた玉作りの技術も導入されたものと考えたい。また守山市内においては使用、いわゆる消費をしていた痕跡を残す遺跡は少なく、生産をしていた遺跡が多い。生産の様相に関しては一般の集落内で生産が行われ、生産体制は必要に応じて製作したような小規模のものであり、專業集団の集落は存在しなかったと考えたい。このことは吉身北遺跡の住居全総数約60棟のうち玉作り工房が3棟しか確認されなかったことから言えよう。

このような成果をふまえて、今後草津市や栗東町の資料も含めた野洲川流域全体の玉作り遺跡の検討が必要と考えている。
(大岡 由記子)

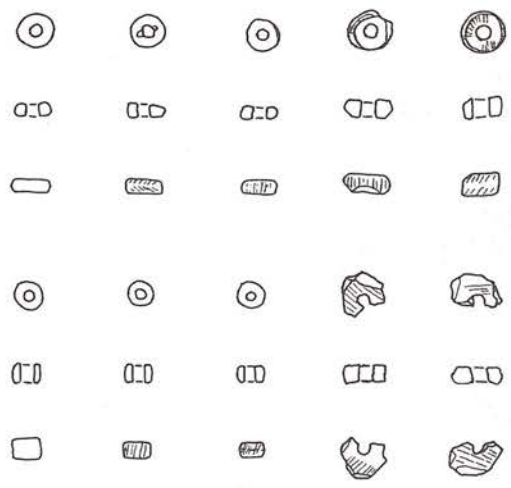
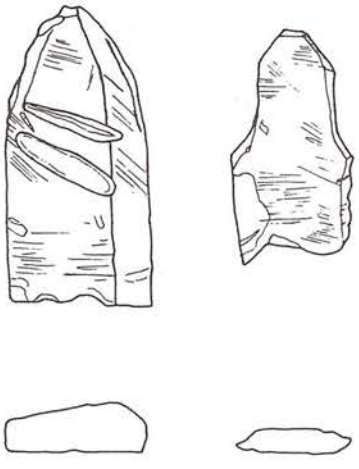
<参考文献>

守山市埋蔵文化財センター『乙貞』第8号～第94号17巻第3号1982～1997

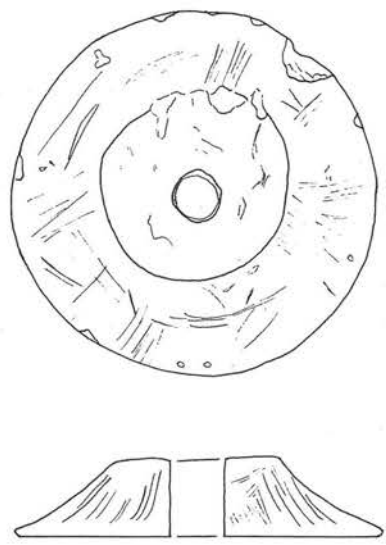
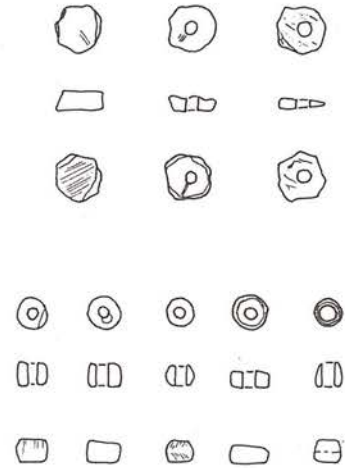
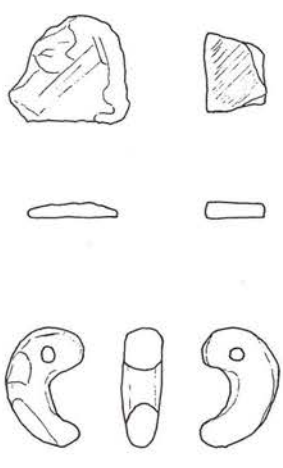
「吉身北遺跡の調査(第16次調査)」『守山市文化財調査報告書』第66冊、平成8・9年度国庫補助対象遺跡発掘調査報告書、守山市教育委員会 1998

「岡遺跡発掘調査報告」『守山市文化財調査報告書』第19冊、守山市教育委員会 1985

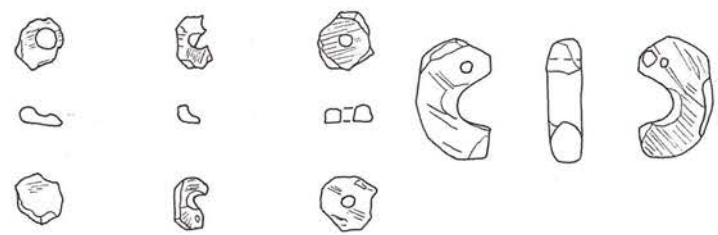
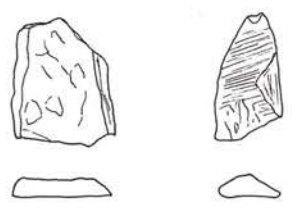
「小高遺跡発掘調査報告書」『守山市文化財調査報告書』第31冊、守山市教育委員会・守山市立埋蔵文化財センター 1988



播磨田東遺跡



金森東遺跡



古高遺跡



図2 玉作り遺跡出土資料実測図 (滑石製)